

---

# 広大な青

泰兎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

広大な青

### 【Nコード】

N 8 6 1 6 D

### 【作者名】

泰兎

### 【あらすじ】

蒼穹家の跡継ぎ、周。彼とその友人、慶と恋は突如異世界へと召喚されてしまう。そこから始まる、剣と魔術を交えた異世界召喚物語。

## プロローグ

それは、昔の出来事。

ファンクイン大陸全土を巻き込む、大きな戦争が起きた。

始まりは、小国同士による些細な争いであつたが、同盟を組み、規模を広げ、次第に全ての国を巻き込んでいった。

時と共に戦火は強まり、徐々に深刻化していく。

事態を重く見た一人の人物が、戦争を止めようと各国々へ投げかけ始めた。

その人物の名は、『ファレス・ヴァロイエ』。

年老いていたものの、彼は稀代の魔術師として名を馳せ、その力は神をも凌ぐと言われた。

強大な力とは裏腹に、彼は争い事を嫌い、仲裁役として大陸を渡り歩いたのだ。

ファレス老により、戦火は収まり始めていた。

しかし、そんな最中。

『ファレス・ヴァロイエ』を邪魔と考えたある国の王は、彼を排除しようと軍隊を差し向けた。

千近くもの大軍に、その力を持つて彼は一人で果敢に立ち向かう。

しかし、ファレス老の体は病膏肓としていたため、途中力尽き敗れてしまった。

結果、再び大陸には火が舞い始め、事態は更に深刻な方へと進んだ。そんな時、一人の少年が戦争を止めようと、新たに立ち上がった。

その少年は、自身を『ファレス・ヴァロイエ』の息子で、『ヴァイテン・ヴァロイエ』だと名乗った。

『ヴァイテン・ヴァロイエ』の力は、ファレス老の力を遥かに上回り、魔術のみならず、剣や体術をも使いこなす程だ。

多少強引ながらも、少年により戦争は収まりを見せ始めた。

そして、遂に。

戦争を終結させようと、各国の代表が集まり、和平を行なったのだ。その場には、少年『ヴァイテン・ヴァロイエ』も呼ばれていた。和平交渉は、滞ることなく進んだ。

国交の回復、各町村への援助等が決まり、無事終了した。  
が。

突如、その場に居た一人がナイフを取り出し、少年へと刺した。人の力を超えた少年に畏怖したため、行ったこと。

『ヴァイテン・ヴァロイエ』が怖い。

ならばどうするか。

殺し、消してしまえば良い。

居ない者に、恐れることはない。

そんな短絡的であるも、人の根元とも言える思考の結果が、その人物を動かした。

血を流し、倒れる少年。

しかし、彼に近寄る者は誰もいない。

他の人物も、同様の思いを抱いていたから。

聡明であつた少年は、その意味を悟ると、己の力を使った。  
空から降る一筋の光。

光は少年の内へと入り込むと、彼を中心に目が眩む程の輝きを、周囲へと放射した。

光が止むと、その場に『ヴァイテン・ヴァロイエ』の姿はなく、床に広がる血の痕が残されるだけだった。

少年が消えたその後、大陸全土に終戦の知らせが撒かれが、流布された知らせの中には、『ヴァイテン・ヴァロイエ』の名は無かった。しかし民衆の間では、少年を戦争を終結へと導いた英雄として崇めた。

## 第一章

秋空。

空は雲一つ無く、秋の空を澄み映す。

夏の暑さも消え失せ、冬へと向かい進むにつれてその寒さが肌に当たり、秋冷を感じさせる。

涼しく心地よかった風も、いつの間にか身体を震わせる程に冷たくなっていた。

「大安吉日、天気は快晴。世は全て事も無しってね」

空を見上げ、一人呟く少年。

平均的な身長に、平均的な身体付き。

髪も瞳も、色は黒

中性的な顔立ちで一見女の子にも見えるが、至って普通の少年。

物語は、彼を軸にして動き出す。

「さてと、ぼちぼち学校にでも行こうかな」

上に向いていた視線を下げ、正面へと戻す。

両手で包むようにして持っていた湯飲みを、隣に置いてあるお盆の上にそっと戻した。

うーん、とバンザイをする様に両手を上げて伸びをする。

そんな彼が腰掛けるのは、敷地内だけで一般的な家が何軒も建ち並びであるう程、大きな屋敷の縁側。

庭は『和』という文字をそのまま表しており、日本好きの外国人に見せたら興奮すること間違いなし、な作りをしている。

「周、もうそろそろ時間ですよー」

「行こうかな」などと言いつつも、未だ動こうとしない周に、後ろから若い女性が声を掛けた。

「うん、母さん」

母と呼ばれたその女性、見たところ二十歳前後といった容姿である。

だが、実のところ歳は三十代後半。

本人は「肌が…、皺が…」と、年齢の増加に伴う皮膚の悪化を甚だ気にしているようだが、周からしてみるとクラスの女子と然程変わらなく見える。

それどころか、よっぽど艶やかな肌をしている。

以前そのことを母に伝えたと、何故か酷く怒られたので触れないことにした。

周にしてみれば、褒めたつもりだったのだが。

どうやら、彼女にしか分からない差異があるようだ。

「父さんは？」

立ち上がり、壁に立て掛けておいた鞆を手取る。

いつもなら並んでお茶を飲むのだが、今日は隣に居なかった。

早起きの父に限って、まだ寝ているということはあるえないので、どうしたのか気になっていたのだ。

「利名さんなら、もう道場に向かいましたよ。行く前に声を掛けてあげてね」

「分かった。それにしても珍しいね、父さんがこんな早く道場に行くななんて」

今はまだ八時前。

利名が道場へ向かうのは、早くても九時を過ぎてからだ。それを知っている周は不思議に感じた。

そんな周の疑問に、母六花が少し思案気味に答える。

「そうねえ…。でも利名さんがいうには、大事なお客様が来るから、って」

「大事な、ね…」

道場の開ける時間を早めてまで迎え入れる程の人、ということだろうか。今までそういう人物がいなかった訳でもないが、片手で足りる程の人数であり、来ても数年に一度ほどだ。

「ほらほら、急がないと遅刻しちゃいますよ」

言われて時計を見れば、いつも出発する時間の少し前。

父の所へも寄るので、そろそろ行かないと母の言う通り遅刻になってしまう。

それだけは避けたいと思い、駆け足で玄関へと向かった。

まだ固さの残る革靴に、靴ペラを使って強引に押し込む。

「それじゃあ、行つてきます」

「はい、行つてらっしゃい。ちゃんと利名さんの所へ寄つてあげてね」

「分かつてるよ、道場だよ」

繰り返し言われたことに多少煩わしく感じながらも、自分が忘れないよう注意してくれていることに感謝。

出入り口を開け、もう一度

「行つてきます」と言い外へ出た。

先程縁側から見上げた時と変わらず、雲一つない晴れ空。

「いい天気だなー。っと、あんまりのんびりしてられないんだっ」  
そう言う周は鞆を脇に抱え、ジャツと地面に敷き詰められた砂利を踏み鳴らし、道場へと駆けた。

蒼穹<sup>ソラノナミ</sup>家の道場は、他の道場より比較的小さい。

昔は今の数倍あったのだが、老朽化が進み建て直した際に、建物のサイズも小さくした。

元々多くの門下生を取らない中、道場だけ大きくても勿体無いと、利名が縮小化を決めたのだ。

おかげで掃除が楽になったと門下生達は喜んだが、それを聞いた利名が悪戯心から季節外れの大掃除を命じた事があった。

しかしそれは、あくまでも余談である。

「父さん、俺もう学校に」

道場に居ることは聞いているので、声を掛けながら入り口を開く。  
しかし中には誰もおらず、周の声だけが響いた。

「あれ、居ないや。母さん間違えたのかな？」

しかつり者の母が、こんな凡ミスをするとは思えないのだが…。  
しかし、実際中には誰もいない。

父はどこへ行ったのやら。

時間が無いことを忘れ考え出した周の背後に、男が近付いた。

初老程の男は白髪も多く、口元や目尻など所々に皺が見受けられ年を感じさせるが、背筋はピンと真っ直ぐで堂々と歩くその姿は、見た目とは懸け離れている。

「おい、周。何をしているんだ？」

「うわあっっ」

不意に話し掛けられ、周は驚き声をあげた。

「父さん…、脅かさないでよ」

はあ、と安堵の息を吐き、利名へと文句を言う。

「別に脅かしたつもりはないぞ。お前が勝手に驚いたのだろう」

「まあ、そうだけど…」

だけど、後ろから急に声を掛けられれば誰だって驚くに決まっている。

と心の中で言葉を続ける。

口に出す勇氣はないが。

「それで、どうしたんだ？学校へ行く時間だと思うが」

「あ、うん。だから父さんに一声掛けてから、と思つて」

「わざわざすまないな。今日は一緒に茶も飲めなかった」

毎朝息子とお茶を飲むことを、楽しみにしている利名。今日はそれが出来ず、少し残念そうな顔をした。

「いいよ、また明日もあるし。こんな早くから準備するぐらい、大切なお客さんなんでしょ？」

「何で知つて ああ、六花から聞いたのか」

「うん」

「昔からの友人でな、頼みがあると久々に連絡が来たんだ」

顔を綻ばせ、昔を懐かしむように郷愁に浸る。

こんな様子の父を始めて見る周は、その友人に会つてみたくなった。



「それとだ、お前にも同席して貰うから、今日は午前中で抜けて来なさい」

「えっ、俺も？」

予想外の言葉に、思わず素の反応をしてしまう。

「ああ、ぜひお前も会ってやって欲しい」

「…何か企んでない？」

そんな大事な客に、それも簡単に会わそうとすることを訝しむ。

普段なら大事な客が来ると決まって、道場へ近寄ることを禁じられてきた。

それこそ、自分の顔を見る度にだ。

ところが今回に限って、学校を早退してまで同席させるとは、どこかおかしい。

そう考えた結果、ついこうした言葉が出てしまった。

「企むとは何を言うか。ただ、成長した息子を見せたいだけだ」

イマイチ納得出来ない周だが、疑っていても仕方ないと素直に了承の返事をした。

後に、その安易さに後悔するのだが。

父とも別れ、学校へと向かう。

腕時計を見ると、時間は既に予鈴十五分前。

「あちゃー、長く話し過ぎちゃったな。遅れるわけにもいかないし…走るしかないか」

家から学校までは近いので、走ればまだギリギリ間に合う。

朝から運動はしたくないのだが、状況が状況。

周は家を出た時同様に鞆を脇に抱え、走り出そうとした  
瞬間。

「やつほ、あまね。今日は随分ノンビリじゃん」

またしても後ろから、突然声を掛けられた。

声の主は分かっているの、振り向いて返事をする

つもりが、先に背中をバシッと叩かれてしまい、思わず踏鞆を踏んだ。

「痛いなあ、恋<sup>れん</sup>」

「気にしない気にしない」

眉を顰めながら改めて振り返り、背中に受けた痛みを訴える。

しかし恋と呼ばれた少女は、そんなこと気にも留めず笑って流した。恋は、利名が開く剣道道場の生徒だ。

元々彼女の兄が通っていたのだが、それに釣られるようにして恋も入ってきた。

今では子供が増えたものの、その頃は同年代があまり居らず、その上兄も止めてしまったため、話し相手どころか練習まで大人相手にすることが多くなってしまった。

それを見かねた周が声を掛け仲良くなり、今のような良好な関係に至っている。

叩かれた部分を摩りながら、周は逆に聞き返す。

「そういう恋こそ、今日は遅いね。珍しく自転車に乗っちゃって」

「でしょー？なんか目覚まし壊れててさあ。それでも起きたのは、習慣の賜物ってやつだね」

自転車に跨りながらも、両腕を組んでウンウンと一人頷く。

「起きたのに、なんで遅刻しそうなの？」

「寒くて布団に包まってたら、また寝ちゃって…」

テヘへと少し恥ずかしそうに笑うと、それを誤魔化す様に時計を見た。

「おっと、こんな所で話してる場合じゃないよ。そろそろ本格的に時間がヤバくなってきてる」

恋は自分の腕に巻かれた、ごつい腕時計を周に見せる。

それを見た周も、本当だ、と焦った様に同意した。

「これじゃ、流石に走っても間に合いそうにないかな」

困ったように、後頭部を見た掻く。そのままチラリと視線を動かし、恋に声を掛ける。

「ねえ、恋…」

「イイけど、一つ貸しね」

周の意図を察し、自転車から降りる。

「オツケ。あ、でもこの前英語の和訳、代わりにやってあげたよね。つてことでチャラ」

「あうつ…、そう言えばそうだった。フツーに忘れてたあ」

受け答えながら周は自転車のサドルに跨る。周に続いて、恋も後ろに乗った。

「運転手は君、車掌は僕っつね。よし、急げ運転手！」

「ラジャツ！それじゃあ、行くよー」

ペダルに足を掛け、グツと力強く踏み込む。

回るペダルに連動してチェーンも回転し、それに伴って後輪を動かす。

車輪は、回り出した。

## 第一章（後書き）

懲りずにも、またやってしまいました。今度はファンタジーです。異世界召喚物が好きな私としては、書かずにいられませんでしたのですよ。と言つても、以前よりちょこちょこ書いていたので、まだストックがあります。あまり勇んで書き出すと、別物が滞るので控えめにいきます。反応を頂けるようでしたら、早めの投稿を考えています。また、周を主役とした某ゲームのパロディも書いてます。ただ、ストーリー上こちらが進まないとネタバレになるので、それまで書けません。ちなみにその某ゲームは、P S 2 化・アニメ化・コミックかが決定しているようなので、それまでには間に合わせたいい心情です。では、また。

## 第二章（前書き）

感想など頂けると、嬉しさから悶絶します。

## 第二章

「なんとか間に合ったね、周」

「……………うん」

「だ、大丈夫？」

心配そうに、隣の席から話し掛ける恋。

「……………ない」

それに対する返事は素っ気なく意味も良く分からないのだが、恋は怒ることなく、寧ろ余計に心配そうな顔つきで周の様子を窺っている。

あの後、周は凄かった。

学校まで自転車でも十分は掛かるところを、その半分の五分で着かせてしまったのだ。

平坦で割と楽な道はあるものの、後ろに一人を乗せてそのハイペース。おかげで今は返事すらまともに出来ず、机に突っ伏している。「よっ、周。朝っぱらから大変だな。後ろに重たい荷物乗せて来たんだろ？」

付した周の頭上から降らしたのは慶けいといい、彼もまた利名の開く道場の生徒だ。

慶は小学校低学年から始めた恋とは違い、中学に上がると同時に道場へと通い出した。

元々才能があつたのか、同じ練習量にも関わらず恋を追い抜き、今では道場内で上位に位置するまでになっている。

「はった、重すぎてタイヤがパンクしちゃうって　このばか」  
「いつてえっ！」

恋は机の上に置いてあつた筆箱を、躊躇うことなく慶の顔面へと投げつけた。

大きな音を起ててぶつかった筆箱は、慶の顔から滑りそのまま周の後頭部へと落ちた。

「……………いて」

まだ疲れているらしく、反応が薄い。

「あぁっ、ごめんね周、怪我はない!？」

慌てて駆け寄ると、周の頭の上に乗ったままの筆箱を除け、優しく頭を擦った。

「…おい」

慶が声を低くして呼ぶが、恋はそんなもの聞こえていないかの様に全く反応を示さない。

恋にとつてはそんなことより、未だ伏したままの周の方に気が掛かっているようだ。

「おいっ テメエ！周より先に、俺に言うことがあんだろ！」

「ない」

振り向きもせず、即答。

対応の差が余りにも酷い。

クラスの女子は、自身の知らぬところで人気を得ている周を心配し、男子は恋に文句を言う慶に同情するように見ていた。

あくまでも、見ているだけ。

さわらぬ神に祟りなし、だ。

朝のHRが終了し、漸く元気を取り戻した周。

恋と、なんだかんだで心配してくれていた慶に礼を言つと、職員室へと戻る担任を廊下で呼び止めた。

「お、蒼穹か。どうした？」

担任の名は、井上武。周たち三年の授業を受け持っており、教科は数学。ちなみに、独身である。

「今日、家の事情で早退したいんですけど…」

「蒼穹のことだからサボリじゃないんだろうが、一応理由を聞いていいか？」

基本、真面目で通る周。

加えて成績も上から数えた方が早い位に良いので、教師からの信用も濃い。

「父の大切なお客さんが来るので、それに俺も同席しなきゃならな  
いんですよ」

「ああ、お前の親御さんは色々と有名だからな。分かった、時間にな  
ったら適当に抜けて良いぞ」

利名だけでなく、六花も剣道界隈では有名な人物である。

共に学生時代から全国大会で何度も優勝を重ねる程の実力を持つ。

その上利名に至っては、剣道の名門、『蒼穹』を継いだ人物ともあ  
つて、各方面に名が広がっている。

そのため門下生の中には、大物政治家や大企業の社長・会長。更に  
は剣道を趣味とする有名芸能人など、数多くの著名人が存在する。

尤も、利名はその身分に於いて区別することなく、一般の生徒と同  
様の扱いをしているが。

逆にそれが良いとして、より人を集めているようだ。

「はい、有難うございます。帰る時は先生の所に寄って行きますん  
で」

「そうしてくれ。それじゃあ、しっかり授業受けるよ」

そう言つて、担任の井上は踵を返し階段を下りて行った。

周も同じ様に反対側を向き、教室へと戻る。

周の席は後ろ寄りなので、後ろ側のドアから入った方が早い。

いつもの通り、後ろから入って自分の席へと向かおうとしたのだが、  
恋と慶がまた何か言い合っている。

それをみた周は、思わず足を止め回れ右。

巻き込まれると面倒なことになるのは、これまでの経験から学習し  
ている。

授業が始まれば二人とも止めるので、周は一時間目の教師が来るま  
で廊下で待つ事にした。

人が多く、熱気の籠もった教室と違って、廊下は閑散としており幾  
何か寒い。

時折トイレへ向かう者や、教科書を借りに他のクラスへと急ぐ者が  
いる程度で、周のように立ち止まっている人物は殆ど居ない。



「父さんの友達…か」父が珍しく…というより、始めてかもしれない。

自分に会わせたいと言っただから、余程仲が良い人なのだろう。昔からということ、恐らく剣道繋がり。

その上父の友人とあっては、腕も相当なものに違いない。

あの人の周りの剣道家は、何故か強い人ばかりが集まってくる。強者は強者を求めやって来るのか。

それでも、父が負けた姿を見たことはないが。

周はいつの間にか、思考が脱線していることに気がつく。

利名が早退させてまで一緒に居るように、と言ったことを気にしていたつもりだった。

しかし、こうも容易く考えが違ふ所へ行くとなると、周が考えているより頭は重要としていないのかもしれない。

「そんなこと、ないと思うんだけどなあ…」

開けた窓から空を眺めつつ、一人呟く。

そこへ。

「なにが？」

「わっつ！」

「きゃあ！」

二度あることは三度ある。

またしても不意に、後ろから話し掛けられ声を上げる周。

その声に驚き、話し掛けた人物 恋自身までも声を上げた。

「なんだ、恋か。ビックリした」

「ビックリしたのはこっち。急に大きな声なんて出して」

「ごめん、ちょっと考え事してたから」

「考え事？何を？」

顔だけ恋へと向け話していた周だが、体勢が辛くなったので体も恋へと向けてから、今朝の事を話した。

「利名先生の友達か。気になるね、どんな人か」

「うん、俺もそう思ってたさ。俺に会わせたいだなんて言うから、余

計に気になつてゐるつもりだつたけど……」

「けど？」

恋は首を傾げ、語尾だけで鸚鵡返しに問い返す。

「気がついたら別の事考えてて」

「あははっ、周らしいね。それで、別の　　っと、先生来ちゃった。教室入る、周」

周はそれに返事をし、開けた窓を閉めてから恋の後を追う。

空が、曇り始めた。

四時間目のチャイムが鳴ると、周はすぐさま帰りの支度をした。机の中にある教科書や、ノートを鞆に詰める。

但し、数字は明日もあるのでそのまま置いていく。

少しでも、荷物は軽い方が良い。

「それじゃあね、恋、慶。また明日」

鞆を持つ手とは逆の手を上げ、親しい友人へと挨拶をする。

「なにっ、周帰んのか!？」

ガバツと席から立ち上がり、慶はそのままの勢いで後ろに振り向く。

「うん、父さんに早く帰るよう言われてて」

「そういうこと。アンタみたいにサボって帰る訳じゃないんだからね」

周の横に並び、腰に手を当てて話す恋。

「俺がいつサボった!？」

「先週『頭が痛くて死ぬ』とか言つて、昼休みの間に勝手に帰ってたじゃない」

恋の全くもって間違いない指摘に、ググツとくぐもる慶。

「頭が痛いんじゃないくて、悪いの間違いでしょ」

さらに一言追撃を食らい、床に手足を付いてへたり込む。

恋はそれを見て、勝った、とばかりに腕を組み鼻を鳴らした。

「いつそそのまま病院に行つて、バカを治して貰つてきなさい」

「恋、それは言い過ぎじゃ……」

苦笑しながらも、慶の落ち込み具合を案じて恋を諷める。

「いいの。これぐらい言わないと、コイツはまた同じ手でサボるんだから」

「やかましーわ！周の言う通り、言い過ぎだー！」

慶は突如立ち上がると、周の台詞に便乗してここぞと反論する。序でといったように、恋の悪口まで言い始めた。

バカ、アホ、マヌケとお決まりの言葉から、水虫、ニキビ、便秘などど、微妙に汚いものまで。

それらを言われても、恋は変わらず腕を組んだまま。

「ふ、ふん。その程度の悪口、何ともないわね」

どこか思い当たるものがあつたのか、若干上擦って言い返す。

慶はそれに気付かず続けたが、遂に言っではいけない単語を言ってしまった。

「貧乳！」

瞬間。

恋は横に立つ周の鞆を引つたくり、慶の顔目掛けて思い切り投げた。その動きに慶は勿論、周も反応出来ずただ立ち尽くすだけ。

顔面に直撃したことで、そのまま後ろへ倒れる慶。

恋は床に落ちた鞆を拾い軽く埃を払うと、何事もなかったかの様に周へと手渡した。

「はい、周。利名先生と約束してるんでしょ？早く行かないと」

「う、うん…ありがとう」

呆然と立ち尽くしていたが、話し掛けられて何とか動き始める。依然仰向けに倒れたままの慶を見たが、起き上がる様子はない。それどころか、軽く白目をむいている。

完全にノビているようだ。

「コレはほつといて良いから、早く行きなよ」

「それじゃあ…また明日ね、恋」

「うん、バイバイ」

そう言っただけ恋は、体の前で小さく手を振った。

周は手を振返し、教室から出る。

「慶、ごめん。成仏してね」  
心の中でそう祈り、廊下を走った。  
慶は未だ、倒れたままだ。

## 第二章（後書き）

二話目です、はい。まだ異世界へと行ってません。相変わらずグダグダと書くのが癖らしく、こうなってしまうました。さて、今回の話で慶がボケ役に決まりました。これから先、彼には高度なボケをお願いしたいと思います。ハードルを上げて期待してみましよう。そして、慶がボケる度に激しいツツコミが待っていることでしょう。そんな訳で、次回よりこの物語は慶によるお笑い成り上がりストーリーとなります。相方には某執事の友人、咲夜さんをお願いしましょう。彼女なら必ずやりとげてくれるはずです。ということで、次回は慶と咲夜さんの出会い編となります。どうぞ失笑混じりでご覧下さい。

### 第三章（前書き）

とぞ、感想など頂けると嬉しく思います。

### 第三章

目の前の状況を、周は理解出来なかった。

全身を覆うプレートアーマーに、顔全体を隠すフルフェイスの兜。右手には両刃の剣を持ち、ダラリと剣先を地面に付けている。

手の部分は、ガントレットを着けていないため素肌が見えており、そのことで中に人間が入っていることが分かる。

周囲を見渡すと、部屋は円形となっており、甲冑の丁度真後ろに階段があった。

壁は石で作られているようだが、明かりが蝋燭だけなために薄暗く、はつきりと視認することが出来ない。

周の隣に立つ慶も困惑した様子で、正面に立つ鎧姿のそれを戸惑いつつも凝視し、また、背後に隠れる様にしている恋は、周の裾を掴み小さく震えている。

と、甲冑は睥睨するように冑を動かし、己の真正面に立つ周の所で動きを止めた。

そして、右手に持っていた剣を中段の辺りまでグツと持ち上げる。その時甲冑の起こした、ガチャツ、という音に、恋の体は一段と強く震え、慶もその音と甲冑の動き反応し、小さく後退る。

ただ、周だけが反応を示さず、冷静に相手の動きを窺うよう見据えていた。

A m a n e

ほんの数分前のこと。

ポケットに入れておいたケータイが揺れた。

授業中は音が鳴るとマズいから、いつもマナーモードにしてある。液晶を見ると、慶からの電話だった。

「竹刀忘れてるぞー」って。

手入れをするために持って帰ろうと、教室に置いておいたんだ。取りに戻るうと思っただけど、持って来てくれるって言ってから甘えることにした。

靴も履き終わってたし、有り難い。

それにしても、恋の一撃からもう復活した慶は凄いと思う。

俺だったら、起き上がれる自信がない。

なんて考えてる内に、持って来てくれた。

なぜか、恋が。

竹刀を受け取り、慶はどうしたのか聞こうとしたら…後ろに居た。

今日は皆して後ろを取る。俺がゴルゴだったら、殺されてるよ。

そんな馬鹿な事を言って、笑いあっていた直後だ。

歪んだのは。

始めは周りが。

次に、慶と恋。

自分がおかしくなったと思ったけど、二人とも同じことが起きているらしく、何かを叫んでいる。

恋が倒れ、慶も倒れた。

そして最後に俺が、倒れた。

気が付き立ち上がると、そこは知らない場所。

辺りを見ると、二人が倒れていたので、声を掛けた。

無事なようで、すぐに目を覚ましてくれて安心した。

二人共立ち上がり、無事を確認し合う。

その途中、俺たちの後ろから、ガチャ、ガチャ、という音が聞こえてきた。

一斉に振り向くと、そこには動く鎧。

本当に、今日は後ろに縁があるね…。

O u t



剣を持ち構える甲冑に、周も足元に転がる竹刀袋から木刀を取り出した。

意図は分らないが、甲冑は剣を向け、明らかに闘う気である。

今、この場で戦えるのは周だけだ。慶も恋も、武器になるような物は持っていない。実力的に言っても、周が一番上。

本物の刃を持つ剣に木刀では相手にならないが、それでも無いよりはましだ。

そう考えた周は、慶と恋を壁際に退避させ、自身は一步前へと出た。甲冑姿のそれも周がやる気になったと察し、再び構えを正す。

そして、自らの内に籠もったモノを、威圧として放った。

多少顔を顰めたものの、変わらず甲冑を睨みつける。

しかし、その後ろに居た二人は堪えきれず、その場へとへたり込んでしまった。

甲冑はまた音を起てて動き出した。

右手だけで持っていた柄に左手を加え、両手で握り直すと右肩で担ぐような構えに変えて、左足を半歩前へと出す。

周も木刀を中段で構え、小さく腰を落とす。

足幅も少し広げ、相手の動きに反応出来るようにする。

甲冑は構えたまま動こうとしない。

周も自分から仕掛けようとはせず、ジッと相手の動きを待つ。

その均衡が数秒。

突如、甲冑が動いた。

剣を担ぐようにしたまま、周へ向かって真っ直ぐに走る。

両者に間隔があるとはいえ、この場所自体が然程広くない。

そのため二人の距離は瞬く間に縮まってしまった。

周は無言のまま後ろに跳び退る。

ブウォン、と剣が風を切る音。

今まで居た位地には、甲冑の剣が再び構えられている。

周は紙一重で攻撃をかわすと同時に距離を取り、なんとか間合いを

上手く測っていた。

だが、甲冑の一撃は大きく、周の想像以上に端へと追いやられてしまっていた。

周は木刀を握り直し、相手を見据える。

自分の後ろには、恋と慶がいる。

これ以上下がる訳にはいかない。しかし、かと言って左右に動こうにも甲冑の巧妙な牽制により、上手いことそれも封じられている。

周は覚悟を決め、木刀を強く握り締めた。

（手だ。唯一防具のない、手を狙う）

仕掛ける部位を決め、相手の動きを待つ。

かわして隙が出来た所を打つ、カウンター狙い。

甲冑は周の攻撃を受け止められるが、周が木刀で剣を受け止めることは不可能だ。

兎に角、動きを待つのみ。

ガチャリ、と音を鳴らし甲冑が再び剣を担ぐ。

周も次の一撃に備えるため、足に力を入れる。

甲冑が攻めようと体を傾け、足を前に出しそのまま駆け出した。

甲冑から音が響き、部屋に反響する。

周も構え、相手の振りかぶった両刃の剣を、跳びかわそうとした瞬間。

「こらあああつ、何やってるのシェリーちゃん！」

階段から突如一人の少女が現れ、大声でそう叫んだ。

声は煩いくらいに部屋中へと響く。

甲冑は声に反応し動きを止める。周は逆に反応出来ないが、それでもやはり甲冑同様その場に立ち止まった。

「まったくもう、危ないから先に様子を見てくるだなんて言っ  
て、剣を振り回してるシェリーちゃんの方がよっぽど危ないじゃない」  
と、言葉を続けたその少女は、腰に手を当てたまま一歩ずつ周達の方へと近づいて行く。

その闖入者に、周は思わず啞然とした。

背は小さく、年齢で言うなら六、七才程度。赤毛の前髪を眉辺りで、後ろと横は肩口で綺麗に切り揃えられている。

甲冑は少女へ振り向くと、剣を床に刺し被っていたフルフェイスの兜を取り外した。

「スマンなミレア、ついな」

そこに見えたのは、蠟燭の火で美しく輝く金糸のような黄金の髪。周達の位地からでは後ろ姿しか見えないが、鎖骨まで伸びる金髪と声から女性であることが分かる。

「つい、じゃないよ。せつかく成功したのに、そんなことしたら意味ないでしょ」

「そうだな、すまなかった」

「もう。それで、どんな人が呼べたのかなって」

ミレアと呼ばれた少女は、シェリーという少女のの横に移動し、遠くを眺めるように額に手を垂直に当て周囲を見回した。

周と目が合う。丁度シェリーの真後ろに居たためだ。

「おおっ、大成功だよシェリーちゃん！しかも男の人だよ男の人、やったね！」

子供の様に両手を上げて喜ぶ。

そしてそのまま上げた手を、隣に立つシェリーの腕絡ませると、ミレアは嬉しそうに顔を綻ばせた。

自分の腕へと抱きつく少女を見下ろし、慈しむように微笑む。

その姿は、先程剣を振り回していた人物とは思えないほど穏やかで、優美な顔立ちをしていた。

恋と同じ位の背丈であるシェリーと、それにしがみつくミレア。

それはまるで、姉妹のように見える。

だが、いつの間にか周の横に来ていた慶が、場の空気を読まずに一言呟く。

「なんだか、木に張り付く小動物みたいだな」

本人は聞こえない程度で言った独り言のつもりであったが、響き易いこの部屋では普通に皆へと聞こえてしまった。

シェリーの体に抱き付いたまま、ピクツと小さく揺れるミレア。

「アナタ…誰が小さいですって？」

台詞と共に、顔だけを慶に向ける。

シェリーは空いた手を額に当て、周も同じ様に片手を額に当てて天を仰ぐ。

周の斜め後ろに控えていた恋も、ミレアのリアクションからそれが彼女にとって禁句であった察し、ヤレヤレと呆れたように肩を竦めた。

ミレアは腕から離れると、先程シェリーが刺した剣を抜き手に持つ。その剣の重量は、本来なら彼女が易々と持てる程軽い物ではない。だが、彼女はそれを物ともせず柄を握ると、剣先を引きずらせながら慶へと一歩一歩足を踏み鳴らし近づいて行く。

気のせいか、緑色である彼女の瞳が、怪しく光って見える。

流石に慶も命の危険を感じたのか、後退り地に手を着き謝り始めた。

「すいませんっごめんなさい！冗談です冗談っ、いやっ、ウソ！」  
何が冗談でウソなのかは兎も角、誠意は通じたようでミレアは歩みを止め剣を床に下ろす。

「それでも私はシェリー近づいてと同じ、十八歳なんだからねっ」  
フンだ、と鼻を鳴らし親友の下へと戻る。

慶はというと、はあああゝ、と盛大に息を吐き出し「助かったああ」と地面に潰れた。

シェリーの下へと歩いていったミレアだが、ふと足を止め振り返る。

小首を傾げ、周を指差す。

とそこから、いち、と一言。

そして次に慶を指し、に。

最後に指を恋へと向け、さん。

それを二度ほど繰り返すと、仲間へと駆け寄り両手を掴み叫んだ。

「どうしようシェリーちゃんっ、三人もいるよ！」

慌てふためくミレアに対し、シェリーは落ち着いた様子で、ハハハ、と笑い返した。

「なんだミレア、今頃気付いたのか。私はここに来た時から気付いていたぞ」

甲冑を鳴らし、背を反らす。

「なら早く言つてよおおおお！」

その声は、部屋中に響き木霊した。

### 第三章（後書き）

第三章投稿です。甲冑等について、正直あまり良く分かっていません。間違っていたら、バシバシ御指摘頂けると嬉しいです。

内容ですが、ここで漸く異世界へとやって来ました。慶はここでも虐げられました。いずれ桃髪の少女に使い魔として使役されたあげく、犬扱いされることは目に見えています。あんなハーレム展開にはなりません。次回、慶が再び異世界へ飛ばされます。おいでませ、ハルニア。頑張れ慶！

## 第四章

「要するに、本当なら一人だけだったはずが、間違えて三人もこの世界に召喚しちゃった訳ですね？」

「はい…、そうです」

椅子に座った周が、ミレアが説明した事をオウム返しで確認する。あれから一同はミレアに連れられ、部屋を出た。階段を上り着いた先は普通の民家で、周たちはそこで漸く今までいた所が地下室だったと理解した。

普通の民家とは言うものの、現代の様なものではなく、石材、または木材で造られている。

それは家屋に限らず家具も同様で、今周たちが座っている椅子やテーブル、棚等も木だけだ。

「ちょ、ちょっと周、そんな話信じちゃうわけ!？」

「そうだぞ周っ、いくらお前が能天気だからって、今のは無理があるだろ!？」

五人テーブルを囲い、椅子に座っている。周の提案でまずは自己紹介した後、ミレアが現状の説明を始めた。

ここが周達の居た世界ではなく、ミレアの召喚術によって呼び出されたのだと。

そして、失敗し一人だけではなく、その周囲の人間をも喚んでしまった、と。

それを要約し、納得したように頷く周。

当然他の二人は信じられるはずもなく、異論の意を示した。

「でもこの状況じゃあ、ミレアさんの話を否定したところでどうしようもないじゃん」

「まあ…そうだけど」

「とりあえず、だな」

周と恋は会話を止め、何か言おうとする慶へと視線を移した。

それに倅い、ミレアも慶を見る。

ただ、シェリーだけは気にする様子もなくお茶を持ち、口へと運んでいた。

「とりあえずだな、俺たちは元の世界で昼飯を食いたい訳よ。そこ  
んどこどーなんだ？」

「……？えつと……？」

変に冗談を織り交ぜたせいで、慶の言葉が上手く理解出来ないミレア。

「つまりは、俺たちは元いた世界に戻れるんですか？」

周の意識で、慶の台詞の意味が分かりミレアは小さく笑う。が、その質問へ良い答えが返せないことに気づくと、シュンとして俯いてしまった。

「まさか…、無理なんて言うんじゃないでしょうね!？」

その様子から察した恋が、強く問い詰める。

語気は強いが、その顔は若干泣きそうだ。

「いえっ、ちゃんとお返しすることは出来ます!けど…」

「けど、何よ」

「三人もの人を喚んだことで、魔力がなくなってしまいました」  
「…どういうこと？」

更に恋が問う。

「つまり、今すぐ皆さんをお帰し出来ないんです」

「そんなっ、何よそれ!」

恋は熱り立ち、椅子を跳ね飛ばす程の勢いで立ち上がると、ミレアへと怒鳴りつけた。

勝手に異世界へ喚ばれた上に、帰せないとなれば当然のことだ。  
怒らずにはいられないだろう。

「恋、落ち着いて、ね？」

「でも周、私たち帰れないんだよ!」

「大丈夫だから落ち着いて。ミレアさんは『今すぐに』って言った  
でしょ、一生帰れない訳じゃないよ。そうですね、ミレアさん？」



「は、はい。魔力さえ戻れば直ぐにお帰し出来ます」

急に話を振られて吃ったが、それでも自信を持って答えるミレア。それを聞いて、恋は不満気ながらも椅子に座り直した。

落ち着き一息したところで、一人が再び声を上げた。

「それですね、ミレアさん」

話し掛けたのは周だ。対するミレアを見つめ、目線を逸らすことなく言葉を次ぐ。

「ミレアさんの魔力はいつごろ戻るんですか？」

一番重要なのは、そこだ。

ミレアは魔力が戻り次第と言ったのだが、それがどれ程掛かるか周たちにとって問題となる。

情報のない者にとって、魔力の回復にどれだけの時間が掛かるかなど知る筈もない。

「私の場合は二、三日経てば殆ど回復します。召喚して魔力が空っぽになったので、全快するには少し時間が掛かるんです」

魔力の回復には、個人差がある。

ミレアのようにゼロから数日で回復する者もいれば、一週間もの時間を掛けないと戻らないものもいる。

これは技術の問題で、より魔術に長けた者である程回復が早い。

初心者は当然遅く、玄人は早くなる。

二、三日で回復するミレアは、魔術士としての能力が高いと言える。人によっては、魔力の代謝を無理矢理上昇させ回復出来る者もいるが、それは体への負担が大きい上に、極限られた人物にしか出来ないため、滅多に使われることはない。

ただこれは、あくまでも魔力が全くない場合であり、少量でも残っている場合は回復に掛かる時間がまた異なる。

「それじゃあ、少なくとも今日の内は無理ってことですね？」

「はい…、申し訳ありません…」

うな垂れるミレアに、愕然として椅子に凭れ掛かる恋。話について行けてないのか、ボーっとする慶、そして何かを考えるよう顎に手

を添える周。

そんな中、やはりシェリーだけが、一人お茶を飲んでいた。

それからどれくらい経ったか、重たい空気の中やおら周が立ち上がると、ミレアに向かい少し堅い声音で彼女の名を呼んだ。

「は、はい、なんでしょうか」

真剣な眼差しで見つめる周に、ミレアは手をギュッと握り返事をする。

慶や恋も、何か思いついたのかと思い、期待をの目を向けた。

しかし、周りのそんな思惑を裏切り、軽い口調で周は言葉を続けた。

「ご飯にしません？俺、お腹空いちゃいまして」

「……は？」

予想外れの台詞に、三人のズレた声が重なる。

「そうだな、私も腹が減った。ミレア、少し早いが昼食にしよう」

今までお茶を飲むだけだったシェリーが、ここにきてやっと声を発した。

尤もそれは、周のように場を案じてではなく、ただ飲んでいたお茶が無くなり、且つ彼女の言葉通り空腹を感じただけなのだが。

「シェリーちゃんまで！今はそんなこと言ってる　ぐるるるうう　……ご飯にしましょう」

顔を朱に染めたミレアに、最早異論はない。

慶は先程の言葉通り、恋も昼食を食べる前に異世界へと飛ばされたため、結局周の提案通り昼食を取ることに納得した。

ミレアが調理場に立つと周が手伝いを買って出たので、彼女はそれではと食材を切るよう頼んだ。

こちらの食材は周たちの世界と大した差異はなく、難なく手伝うことが出来た。

とは言うものの、全てがそういう訳ではなく、流石に異なる物があったため、幾らかたじろいってしまったのだが。

「おい、恋。なんで男の周が手伝ってるのに、女のお前が座って待

ってるんだよ」

「うるさいわね、今は女だからなんて言う時代じゃないでしょう。料理なんて男女平等須くよ」

「おお、レンは良いことを言うな」

「でしょー？」

「…けどその言い方だと、男も女も料理は出来て当然ってことだよな」

「……………」

「……………」

そんな会話を聞いていたのか、周とミレアも同じ様な会話をしていた。

「アマネさんは男性なのに料理が上手なんですね」

「ええ、まあ。母の手伝いをしている内に覚えてちゃいまして」

「いいですね。シェリーちゃんも覚えろとは言わないから、せめて手伝いくらいしてくれればいいのに」

鍋に入ったスープをかき混ぜながら、はあ、と息をつくミレア。そんな彼女を見て、周は思わず苦笑した。

「ところで、ここはシェリーさんと二人で暮らしてるんですか？」

かき回す手が小さく揺れ、スープに書かれた円に歪が走る。

「いいえ、私一人ですよ」

「ならシェリーさんは」

周が言い終える前に、ミレアはそれを遮り返事をする。

「彼女は友達です。私が一人なのを気にして、今日みたいによく遊びに来てくれるんです」

「そうですか。では、失礼ですけどご両親は？」

ミレアの手が止まる。

「…いません」

「え？」

「大分前に亡くなりました」

「あつ……………すいません」

周も野菜を切る手を止め、ミレアの方へ顔を向けた。

「構いせんよ、もう昔のことですから。それに、今はシェリーちゃんもいますし」

そう告げるミレアは、夢げに

そして、可憐に微笑んだ。

「さあ、できましたよー…って、何やってるんですか、ケイさん」  
焼けたパンをバスケットに移し、テーブルへと運ぶ途中。うつ伏せになって床へ寝っ転がる慶を見つけ、訝しげに声を掛けた。

「ミレアさん、そのことなら放って置いていいわよ。乙女の心へ土足で踏み入った不届き者に、天罰が下っただけだから」

「はあ…」

そう言われると、素直に慶を避けるように足を進める。

周は、時折小さく震える慶に同情の目を向けると、その後何もなかったように鍋を抱えミレアと同じ様に移動した。

両手が空いていたなら、横にしゃがみ手を合わせていたことだろう。  
合掌。

「まだ死んでねえ！」

勢い良く起き上がると、慶はどこかに向かつて怒声を放った。

他の四人は、それを可哀想な目で見つめていた。

「ほら、慶。お昼ご飯出来たよ」

「おっ、待ってましたっ」

ご飯と聞いて、飛び跳ね席へと戻る慶。

その様子を見て、四人は皆、ため息をついた。

## 第四章（後書き）

四章目終了です。魔術について、設定を若干書かせて貰いました。話が続けば徐々に追加していく予定なので、どうぞお付き合い下さい。今回も慶は虐げられました。一言多いものの、正鵠を射た発言だったような。さて、食事シーンで終了した訳ですが、それにより次回は新たなジャンルに突入します。フードファイト。要は、大食い対決ですね。懐かしい。対戦相手は無敵のチャンピオン、くさな…いえ、井原満です。お題はドラマの最終回を飾った牛丼。次回、慶対草薙…いやいや、井原満のフードファイト。慶の胃が唸りを上げます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8616d/>

---

広大な青

2010年10月9日20時30分発行